

陽向が指先に広げているのはボディクリームだった。

「あつ、ちよつ、ま、心の準備が！」

——チュプツ。

「——んあっ！」

全く話を聞かない男だ、と涼介は思う。

陽向は涼介の慌てようを面白がるように笑いながら、容赦なく後孔に指を入れ込んできた。

「お、すげつ、入った入った♪」

「んっ、う……」

異物感に、涼介は眉を寄せて顔を顰める。傍にあつたペカチュウのぬいぐるみを引き寄せ、縫るように抱きしめた。

「くるしい？」

「ちょ、超……違和感……」

「ふうん？　これは？」

ぐいっと、陽向が手首を捻る。その指先が、涼介の粘膜をかき分けた。

「あうっ……」

「ははっ、変な声」

……この、やろう。

涼介は心の中で毒づくが、声に出す余裕はない。

「なんかもう一本いけそう」

「えっ?!　あっ!　んんっ!」

「おー!　いけたあ」

「おま、まじで……ちよつと、容赦してくれよ……」

訴えても、陽向はニヤニヤと笑うばかりだ。チュプチュプと、入れ込まれた二本の指が中を探る。

「ふっ、んっ……ううっ……」

ペカチュウを強く抱き寄せ、涼介は唸る。

「どこだろ、この辺……かな？」

「——っ！ あっ！」

ピクン、と身体が無意識に跳ねる。

今のは確実に、陽向の指先が“そこ”を掠めた。

「お、もしかしてここ？」

「あっ、ん、えっ、な、なにこれっ、んあっ！」

信じられない、と涼介は混乱する。

尻だぞ。まんこじゃない。それなのに、指を突っ込まれて、擦られて、腹の奥から込み上げてくるこの感覚は、これまで一度も知ったことのないものだ。

涼介はペカチュウを抱きしめたまま、どう反応していいのか分からず、ただ戸惑っていた。

「あっ、ひなっ、待って、そこ、まじで、んっあっ……変かも……!」

「んじゃ、このコリっとしてんのが前立腺かあ」

「あ、あっ、んっ!」

「ははっ、義兄さん、めっちゃ女の子みたいな声でてる」

カッと、顔が熱くなる。

尻をいじられてはいるが、涼介とて年上としてのプライドがある。

「誰が、お、女の子っだ——んあっ♡」

「誰って、義兄さんだよ。ほら、ここグリグリすると、腰ヒクヒクさせてアンアンいうじやん」

「言って、な、あ、あっ——♡」

——グチ、グチ、グチ。

ボディークリームで滑った陽向の指が、涼介の中を出入りする。

やばいぞ、これは。興味本位だったはずなのに、想像していたラインを軽々と越えてくる。気持ちいい、という評価を下す前に、身体が先に答えを出してしまっているのが一番まずい。

「ふ、うううっ——」

気持ちいいから、やめてほしくはない。だが、女だなんて言われるのは腑に落ちない。童

貞だって男だ。

涼介はピクピクと腰を跳ねさせながらも、必死に漏れそうになる声を抑えた。

ぎゅっと閉じていた瞼の向こうに、気配を感じる。

うつすら目を開くと、尻に指を突っ込んだまま、陽向が何かを観察するみたいに涼介の顔を見ていた。

「な、なんだよ……」

「いや……義兄さんってさ」

その途中で、脚を押さえていた陽向の手が伸びてくる。

反射的に目を閉じると、鼻に乗っていた重みが消えた。メガネを取られたのだ。

それに気づいて、もう一度目を開ける。やっぱり、陽向が至近距離でこちらを覗き込んでいた。

「服とか髪型とかクソダサいけど、顔は可愛いよね」

「……………は？」

「うん、なんか。可愛い」

「だ……だから、なんだよ？」

「うん、キスとかしてみたい？」

「は……はあ?!」

涼介は慌てて体を起こそうとする。だが、入れ込まれた指がわざとらしく、くつとその場所を捉えてこねた。

「あっ、ああっ♡」

思わず声が漏れ、背中からシートへと崩れ落ちる。

陽向が頭の横に手を置く。その顔が、ゆっくりと近づいてきていた。

「ま、まって——んむっ！」

してみていいか、と聞いてきたくせに、結局許可は取られなかった。

陽向はそのまま、涼介の唇に自分のそれを重ねてくる。

「んっ、んむっ——んんっ、はあっ！」

——ちゅ、じゅるるっ、ちゅぱっ。

舌の裏を舐められ、唾液を送り込まれ、呼吸もままならない。角度を変えられながら、何度も唇を喰まれる。

「下手くそだな」

「んむっ、は、あっ……」

合間であっさりバカにされるが、反論する余地もないまま、また舌を吸われる。下半身では相変わらず、グチグチと指が内部を刺激していた。



「も、や——やめろっ！」

涼介は、握っていたペカチュウのぬいぐるみを陽向の顔に押し当てる。

「なんでやめんの？ いいじゃんべつに。女の子はキスしながらまんこいじるとめっちゃ濡れるけど」

「ふざけんな、俺は女の子、んっ、あっ、とは、ち、ちがつ、んっ、あっ、あっ♡」

——グチグチグチグチ。

「へえ？ 違うの？」

「ん、違うっ♡ あ、も、待って……ひな、それやばい♡」

ピンクピンクと、腰が跳ねる。陽向は、涼介が反応する同じ場所ばかりを、執拗に指で擦ってくる。

「やばい？ いきそ？ ねえ、義兄さん、こっち向いてよ。キスしよ？ 舌舐めるの気持

ちよかったでしょ？」

「あ、し、ないっ——キスはっ、ん、ぶっ、んっ、んっ♡」

——じゅっ。ちゅぱ。

——ジュブジュブジュブジュブ。

「ん、んんっ♡」

まずい。何か、お腹の奥から込み上げてくる。陽向の指は小刻みに動き続けて蓄積された快感が、びくびくと涼介の腰を揺らしていた。

「あっ、ひな、へ、変だ……な、なんか」

必死に顔を反らしても、陽向はしつこく追いかけるように唇に吸い付いてくる。堪らず、涼介はその頬をぐっと押しのけた。